

北海道新聞の夕刊紙面、「私のなかの歴史」、「ヒグマ研究45年」連載の11回目(8月29日)を載録します。編集委員の「中尾 吉清」さんが取材文章化。

3

6版

2014年(平成26年)8月29

私のなかの 歴史

母グマの子育てについてお話しします。北海道開拓記念館に勤め、胆振管内厚真町の道有林に通い始めた45年前から多くの母子を見てきました。ヒグマは1〜3頭の子を産みます。3頭生まれるのは全体の1・7%とごくまれで、2頭が47%、1頭は51%です。冬ごもりの穴で出産。穴を見ると、生まれた子のふん尿はあります。母グマがなめ取っているのですね。母グマのふんは穴の隅にあります。

動物学者

かどさき
門崎

まさあき
允昭さん



4月下旬から5月上旬に冬ごもり穴を出てくる。このごろの子グマの体長は50センチくらい。6月に60

ヒグマ研究45年 ⑪

子育て

程くらいです。子グマはよろけながら必死に母の後をついて歩く。時々、母グマは子のそばに行つて体をなめて元気づける。愛情に満ちた感動的な子育てです。

危険が迫つて「来い」というときに、子グマが来ないとたたくこともありますよ。

雌雄とも冬ごもり穴を出たクマが真っ先に向かうのは湿地で、「ミスバシヨウを食べる」と言われますが、私が観察したところ、同じサトイモ科のザゼンソウを好むようです。特徴的な花序と仏炎苞は母グマと、その胸元に寄り添う子グマ



〈追加写真〉 日高山脈の
エサオマントツタベツ岳(1901m)の
エサオマントツタベツ川源頭カールの
雪渓を登る母子熊、(7月)

子育て 追い払った先見続けた母

残り、莖葉と根を食べます。

ザゼンソウがある所はクマの着き場になる可能性があると云えます。標高が高いとザゼンソウがないので、ミスバショウを食べます。いずれも刺激物があり、人間が口にすると、口内が焼けたたれるので注意してください。

大雪山系で、大雪山ヒグマ調査会代表の小田島護さんが1980年から観察していた有名な「ヒグマのK子」。私も、81年から91年まで度々8月か9月に高根ヶ原東部の高原沼一帯で観察しました。K子は80年から12年間で4回出産し6頭の子を育てました。

1、3回目の出産は双子で2、

4回目は1頭。子が1頭の場合、1歳で自立しました。栄養豊富なおっぱいを独占できて早く成長するからです。2頭の場合は2歳で親離れしました。

85年に生まれたのは四郎、五郎の兄弟です。2頭はいつもじゃれ合い、取っ組み合って遊んでいました。そんな時、K子は無関心で草を食べたりしています。

しかし、四郎は翌年8月、落石が当たって死んだ。五郎は臆病で、いつもK子に寄り添っていたので難を逃れました。K子は四郎の死骸を食べてしまいました。そうすることが愛情で、わが子の死を受け入れ、けりを付けているのでし

よう。

四郎が死んでからK子は、頻りに五郎の遊び相手をするようになりました。それも、大げさなアクションで。母グマは、子グマの成長に遊びがとてふ大事だと分かっているんですね。

母子の別れは春から初秋のころ。K子は五郎を2年5カ月育てて、87年7月に自立させた。K子は徐々に五郎と距離を置き、やがて威嚇して追い払いました。

五郎はそれでも母を忘れられず、時々、K子が見える場所に現れ、母を見つめ、寂しそうに何度も振り返りながら立ち去ります。K子も、五郎の行方を静かに見つめていました。見ている、涙が出るようになる、別れのシーンでした。

(聞き手・中尾吉清)